2016年
6月27日
月曜日

クラクションは必要か？

松枝　法道　教授（環境経済学）

ある休日の朝、大変腹の立つ経験をした。息子と信号機のある横断歩道で信号待ちをしていると、突然私たちに向かって走ってきた車にクラクションを鳴らされた。知り合いがあいさつで鳴らすような「かわいい」クラクションでもなかったので、訳もわからずに周囲を見回すとその車は道路わきのガソリンスタンドに入りたかったのだということが分かった。ガソリンスタンドの入り口が点字ブロック付きの横断歩道と一緒というのも理不尽な話だが、その時は平気でクラクションを鳴らし、道を空けても一礼もしないドライバーにむしょうに腹が立った。

私は自分が運転するときは、決してクラクションを鳴らさない、というか、鳴らせない。あのけたたましい音を出して、通行人や他の車を威嚇して何の得があるのかと思う。先を急ぐ上に、車という密閉された、それでいて、うまく意思疎通のとれない他のドライバーと関わらなければならないという状況の特性によって、「性格が豹変して乱暴になる」とか、「本当の性格がでる」というのはある程度は理解できる。とはいえ、わざわざあの威嚇音を出すためにハンドル中央のブザーに手をかける神経は想像できない。

そもそも車を安全に運転するうえでクラクションは必要なのだろうか？道路交通法では基本的に普段はクラクションを鳴らしてはいけないと規定されているが、逆に鳴らすことが義務とされているのが、峠のカーブなどで対向車が確認しづらいときである。しかし、今となってはセンサー技術を使った信号装置を設けることは簡単だろうし、それこそ、最も安全な運転はスピードを落として集中し、対向車が来る可能性を頭に入れて運転することであろう。ちなみに、あの挨拶代わりのクラクションはどうか？それに代わる行為はいくらでもあろう。一般的なドライバーにとってクラクションがどうしても必要という状況が私には思いつかない。

しかし、私の想像力は大したことがないのも事実だし、クラクションの実用性を高く評価している人もいるのかもしれない。いろいろなタイプの人間がいるときに、社会として望ましいクラクションの使われ方を実現するにはどうすればよいのだろうか？私は個人的に「クラクション税」の導入を提唱する。一度クラクションを鳴らすたびにクラクション・メーターが進んで、車検の時に一回のクラクションにつき１００円を徴収する。この税金の根拠は環境税と同じである。クラクションを鳴らす人は、自らの行為が第三者に与える影響を考えていないので、その迷惑料を徴収することにより、社会全体の幸せの合計を増やすような行動を促そうとするものである。クラクションが禁止になったわけでもないので、鳴らすのに１００円を超える価値があると思うドライバーは鳴らし続ける。しかし、私は１回１００円という低額でさえも、威嚇のためのクラクションに限っては激減するのではと推測する。

私が一番おぞましいと感じる光景は、クラクションに対して、クラクションで対抗している姿だ。対応を誤ると暴行や、時には殺人につながることもあるようだ。私の心理的苦痛を和らげてもらうためにも早くクラクション税を導入してほしい。私にとってはクラクションが鳴り響く光景は殺伐である以外のなにものでもない。■